編集後記

大変遅くなりましたが、本研究懇談会会誌第 24 巻 2 号をお届けします。12 月 16 日～18 日にタイのチェンマイで、Prof. Kate Grudpan を実行委員長として開催されました International Symposium on Flow Based Analysis VII のため、大幅に編集作業が遅れましたことをお詫び申し上げます。

今回の巻頭言欄には、岡山大学の本水先生ともご親交の深いポーランドの Warsaw 大学の Trojanowicz 先生にご寄稿をお願いしました。巻頭言に添付のお写真は、岡山大学訪問中に撮られたものだそうです。巻頭言のご趣旨は、流れ分析法の miniaturization 化であり、いたるところに nano の接頭辞のついた用語、例えば、nanofluidics や nanomechanics, nanoparticle, carbon nanotube などが見出されます。また、国内からの巻頭言は首都大学東京の伊永隆史先生には「フローシステムを活かした前処理研究の期待」というタイトルでご寄稿いただきました。実試料の分析では、試料の前処理が最も時間と手間のかかる段階でありますが、流れを利用してその前処理操作を自動化、迅速化できれば計り知れない効果が期待できるとのご意見です。

総説欄には、五十嵐淑郎先生および佐藤生男先生にそれぞれ、ポルフィリンを利用した新しい流れ分析法およびアルコール飲料中の尿素の FIA 法についてお纏めいただきました。

研究論文の欄には、今回は国外から４報の論文が投稿されました。そのうちの一つは Prof. Ruzicka からの久しぶりの投稿でした。Hawaii に住処を構えておられるとのことで、ハワイにお出かけの方がありましたらお声を掛けていただければ、大変喜ばれるのではないかと思います。

トッピクス欄には Prof. Dasgupta の研究室に滞在中の大平慎一氏と私の研究室に滞在中のセルビア Novi Sad 大学の Guzsvany 嬢にご寄稿いただきました。大平氏には SIA と FIA の短所をお互いにカバーすることのできるハイブリッドインジェクション法を紹介していただきました。

報告欄では、９月にベルリンで開催されました ICFIA2007 の報告を Prof. Christian にご寄稿いただきました。また、小川商会の樋口慶郎氏にもご寄稿いただきました。同氏の紹介は、Chrisitian 教授の発表者の講演内容を紹介したものとは異なり、いわゆる道中記であり、皆さんより先に記事を大変楽しませていただきました。

国内の学会情報は、徳島大学の田中秀治先生に、また、FIA Bibliography は、岡山大学の高柳俊夫先生に引き続きお願いしております。大いにご利用いただければ大変うれしく思います。

12 月にタイのチェンマイで行われました流れ分析に関するシンポジウムでは、若手の研究者や学生さんが大いに活躍したシンポジウムでした。次号では、このシンポジウムで発表された研究を本誌の研究論文として投稿していただくことにしております。今後とも、この会誌を会員の皆様との情報交換の場としたいと思っております。ご要望並びにたくさんのご投稿をお待ちしております。

JFIA 編集委員長

今任稔彦